

再現装束の染色について

吉岡 更紗

『源氏物語』は紫式部によって描かれた長編小説である。光源氏の生涯を、恋愛を中心に描かれた物語でありながら、紫式部は宮中の人々や、風趣についてきわめて細やかに記述している。各帖中で印象的な場面があり、登場人物を草木花や色、季節に喩えるように際立たせ、宮中の儀式や祭礼、そして季節の移り変わりに合わせて貴族達が何枚も衣裳をかさね、その季節の草木花の彩りを映したかさね色の描写についても事細かに描写している。その当時の何とも華やかな王朝の美を思い浮かべられるのである。

しかしながら、平安時代の装束は現存しない。今回のプロジェクトで、紫式部の描いた衣装のさまや、透過する色合い、かさなり合う色の美しさを生み出すには、絵画や様々な資料を見ながら想像し、自分の中で明確に色合いを構築しながら進める作業が必要であった。

例えば紫色に染めるという作業も、濃淡があり、青みや赤味という差がある。その上に先染めの場合、経糸と緯糸をそれぞれに染めた後に織られる組織や文様、密度、見る角度によって色合いはかなり変化する。染める作業も、選

ぶ染料、抽出、温度、酸性度、季節、時間など全てにおいて慎重に作業を進めた。

日本には幸いにも、平安時代から一時代を遡る飛鳥・奈良時代の染織品が、発掘ではなく伝世品として東大寺正倉院に遺されていて、経年変化はあるものの、今では失われてしまった植物染料による色合いを見ることが出来る。また、平安時代に編纂された律令の施行細目である『延喜式』が遺されていて、染織に関する記述として第十四卷「縫殿寮」の「雑染用度」条に記された三十種類の色名とそれを染めるために必要な植物染料、灰や酢などの媒染剤などが列記されている。

例えば「深紫綾一疋。紫草卅斤。酢二升。灰二石。薪三百六十斤。」という具合である。

材料が記されているのみで具体的な手順は示されておらず、染織手引書ではないため、祖父の代から試行錯誤を繰り返しながら、習得された技法で染色を行った。

以下、実際に使用した染料を衣装ごとに列記していく。

一 柳の細長

表地 地文亀甲上文唐花 先染 経糸・生糸(無染) 緯糸・練糸(精練無染)

裏地 繁菱文 後染 柳色(蓼藍×黄檗)

精練は、稲藁を燃やし一晚熱湯につけた上澄み灰汁を熱し、沸騰状態を保ちながら生糸を入れ、温度を保ちながら

約四十分糸繰りを繰り返しながら行う。糸のもつセリシンが溶けて、糸の手触りに粘りがなくなると精練が完了する。その後湯洗いと水洗いをする。

裏地は、藍染に黄檗を染め重ねて柳の葉色を表した。蓼藍の葉を発酵させて作られた薬^{すくも}を原料として、灰汁（木灰を水に一晩つけた上澄み）と共に、藍甕に仕込む。発酵が促されたら、染色が可能となる。先ず蓼藍で青く染色し、その後、黄檗を煎じた染液で黄色を染め重ね、ここではやや青みのある緑とした。

二 萌黄の小袷

表地 地文白小葵上文唐花丸文 先染 経糸・生糸 薄萌黄色（蓼藍×黄檗） 地緯糸・練糸（精練、無染）

胴緯糸・練糸濃萌黄色（精練、蓼藍×黄檗）

裏地 平絹無地 後染 萌黄色（蓼藍×黄檗）

経糸は、蓼藍で限りなく淡く淡く水色に染め、その後黄檗を煎じた染液でこちらも限りなく淡く染め重ねた。地緯糸は精練のみの白が織り込まれ、更に裏地の萌黄色が透けて見えるため、経糸がほんのり淡く染まっていることが目視できないかもしれない。それほどに淡く染め上がっている。唐花丸文は、精練をした後に、同じく蓼藍に黄檗を染め重ねて濃い目の萌黄色とした。青みと黄味のバランスは丁度中間位。ふっくらと織り込まれる丸文の美しさが際立つように心がけて染めた。裏地も同じく蓼藍に黄檗を染め重ねている。

三 表着

表地 葡萄立湧文 先染 経糸・生糸 藤色(紫根) 地緯糸・練糸藤色(精練、紫根)

胴緯糸・練糸淡藤色(精練、紫根)

裏地 平絹無地 後染 藤色(紫根)

経糸は生糸のまま、地緯糸、胴緯糸は精練後の糸、裏地は生絹の布を紫草の根、紫根で染めた。大分県竹田市で栽培された紫根は色素が多く美しい紫色に染まる。石臼に入れて杵で叩き、細かく砕く。その後麻の袋に入れて、約五十度のお湯の中で揉むと紫色の色素が溶けだす。これを二、三度繰り返して染液を得る。そこに糸を入れて染める。媒染には椿の灰を使うこともあるが、今回は明礬を使用して発色定着を促した。この作業の繰り返しにより、色を濃くしていく。胴緯糸は、紫の色合いがほんのり感じられる程度にとどめ、麗しい光沢が出るように考慮した。

四 重桂

表地 藻勝見文 経糸緯糸共に生糸で織後(精練、無染、砧打ち)

裏地 平絹無地 後染 萌黄色六色濃淡(蓼藍×黄檗、砧打ち)

表地は、先染めの糸と同様の方法で、稲藁を燃やした灰から灰汁を作り、50度〜60度ほどの湯の中で練り、精練をおこなった。その後、砧と呼ばれる木槌で布を叩くように打ち、精練により生まれた光沢を更に出した。裏地は、藍染をした後に、黄檗を煎じた染液で染め重ね萌黄色とした、六枚の重桂となるため、濃淡の具合が絶妙になるよう、

染色に大変苦心した。裏地も表地同様に、砧打ちを施し、上品な光沢を生み出している。

五 単衣

遠菱文 先染 経糸・生糸 濃茜色（日本茜） 緯糸・練糸 濃茜色（精練、日本茜）

経糸は生糸のまま、緯糸は灰汁精練を施したあと、それぞれ日本茜で染色した。日本茜は、黄味が強く、色も濁りやすいことから室町時代以降に染色された例は極めて少ない。黄味や濁りになるべく出さないように、一晩水に浸け、酢をいれた水で煎じて抽出する。濃茜色とするまでに経糸で二日、緯糸で四日を要した。使用した日本茜の量は、経糸で二キ口、緯糸で五キ口。茜で染めた赤色を、茜色、もしくは緋色という風に称される。光り輝く茜色となった。

六 袴

無地綾 後染 朱華色（梔子×紅花）

梔子の実を煎じたものを染料とし、そこに布を入れて練り赤味のある黄色に染める。その後紅花の赤を染め重ねて朱華色とした。紅花には黄色と赤の色素が存在するが、黄色の色素は水に流れやすいため、一晩水につけておき、翌日何度も水を入れ替えながら洗い、ある程度黄色を洗い流す。稲藁を燃やした灰を一晩熱湯につけた灰汁で紅花を揉む。アルカリ性のもので揉むと紅花がもつ赤色が抽出されるのである。この作業を四度ほど繰り返して赤い色素を得ると酢をいれて中和（中性）させ、布を入れて練り染める。ある程度染まると烏梅（うばい）を熱湯につけた水溶液（酸性）の中で

布を繰り、赤の色をより鮮やかに発色させるのである。

七 裳

本体 三重襷花菱 波と松 藍泥

大腰

小腰 後染・刈安 飾り紐・藍染

藍泥は、しっかりと藍染めした麻生地をアルカリ度の高い灰汁につけて、藍の色素を抽出した後沈殿させて得られる顔料である。小腰は、平織の平絹を刈安で青みのある黄色に染めた。刈安の葉と茎を煎じ、得られた染液で染め、明礬媒染を行う。それを繰り返して濃く染めていく。飾り紐は、藍甕で濃く染めた。

八 唐衣

表地 唐花飛文 先染 経糸・生糸 杜若色(紫根) 地緯糸胴緯糸・練糸紅藤色(精練、紫根)

胴緯糸・練糸刈安色(精練、刈安)

裏地 卍繫 後染 香色(丁子)

経糸は生糸のまま、紫根を用い、表着と同様の方法で、濃く染めた。緯糸は精練後、少し赤味の感じられる淡紫色とした。刈安色は刈安を用い、金色のようにみえる、輝くような黄色となった。

裏地には丁子(クロップ)を用い香色に染めた。匂い立つような色合いである。

九 打衣

無地綾 後染 深紅(紅花)

袴と同様の技法で、紅花のみで深紅をあらわした。濃い紅色にするまでに一日四キロの紅花から赤い色素を抽出し、延べ八日の日にちを要した。染めた後、更に光沢を出すために砧打ちを施している。

今回の復元にあたり、一番危惧したのは褪色についてであった。植物染めで染色するにあたり堅牢なものもあるが、「紅はうつろうものぞ」という歌が遺されているように、紅花の色はほとんどが褪色しており、元の姿をとどめていない。重桂の裏地に指定された萌黄色の濃淡も限りなく淡い緑の中での縋綯が、どれほどの色を保っていられるのだろうか、非常に心配するところであった。

当時の貴族の生活を考えると、日の燦燦とあたるところに一日中いるということは考えにくいが、どれほど色が保たれていたのか、また電気などの設備のない、日光とほのかに光る灯明にたよった当時の人々には、このかさねられた衣装の色がどう映っていたのか。興味は尽きることがない。

(染司よしおか六代目)